

東京都遺跡調査・研究発表会

48

発表要旨



令和5年1月22日

国分寺市立いずみホール

主 催 東京都教育委員会
 国分寺市教育委員会

共 催 (公財)東京都スポーツ文化事業団
 東京都埋蔵文化財センター

【表紙口絵】 武蔵国分寺跡第 754 次調査 掘立柱建物 SB39 瓦側壁

武蔵国分僧寺講堂跡から北西へ約 100 m 離れた地点で、北方・推定中院地区の西端にあたる場所から大型土坑^{どこう}を付設する南北棟の掘立柱建物が 1 棟見つけられました。身舎^{もや}と土坑の間には、平瓦を主体とする瓦を最大 5 枚積み重ねた側壁を有する特徴的な建物で、側壁^{そくへき}の総延長は 5.3 m を測ります。側壁底は中心付近が窪み、高さは平均して約 30cm を測る一方で、南北の両端に向かって緩やかに立ち上がり、端部付近で瓦は 1～2 枚を配しています。

側壁に使われた瓦は、現存するものだけでも約 50 枚を数えますが、付近には崩落した瓦が散在し、一部は埋設管で破壊されているため、本来的には 70～80 枚程度の瓦を使用したものと思われます。なお、瓦は平瓦に加えて丸瓦や軒平瓦をわずかに含み、いずれも完形品や一部欠損している程度の遺存状況が良好な瓦を意図的に用いている印象です。

瓦の積み方は平瓦の広端面を西側（土坑側）、凹面を下に向け、垂直方向ではなく 10cm 程度東側にずらしながら「階段状」に積み上げていることを基調としています。一部に凸面を下に向けた平瓦や、直交に配置して積み上げた丸瓦や平瓦があり、補修した痕跡である可能性が考えられます。

（文：依田亮一）

目 次

【午前の部】

開会挨拶 10:00～10:05 東京都教育庁地域教育支援部管理課長

発表1 10:05～10:35
東久留米市 川岸遺跡^{かわぎし} 佐藤悠登 2

発表2 10:35～11:05
北区 十条台遺跡群^{じゅうじょうだい}南橋遺跡^{みなみばし} 山崎太郎 4

休 憩 10 分

発表3 11:15～11:45
足立区 花畑遺跡^{はなはた} 増田静香 6

発表4 11:45～12:15
板橋区 成増天神脇遺跡^{なりますてんじんわき}横穴墓群^{よこあなぼ} 小山侑里子 8

昼 休 み 55 分

【午後の部】

開催市挨拶 13:10～13:15 国分寺市教育委員会教育長

公開講演 13:15～14:15
『武蔵国分寺跡の史跡指定に尽力した郷土史研究者「稲村坦元」^{いなむらたんげん}の事績』 酒井清治 10

休 憩 5 分

発表5 14:20～14:50
国分寺市 武蔵国分僧寺跡一^{むさしこくぶんそうじ}北方・推定中院地区一^{ちゅういん} 依田亮一 12

発表6 14:50～15:20
江戸川区 上小岩遺跡^{かみこいわ} 高橋 亮 14

休 憩 10 分

発表7 15:30～16:00
新宿区 納戸町遺跡^{なんどまち} 尾田識好 16

発表8 16:00～16:30
国分寺市 中藤新田分水跡^{なかとうしんでんぶんすい}（胎内堀^{たないぼり}） 寺前めぐみ 18

閉会挨拶 16:30～16:35 東京都教育庁地域教育支援部管理課課長代理

紙上発表 港区 国史跡 旧新橋停車場跡^{きゅうしんばしていしやじょう}及び高輪築堤跡^{たかなわちくてい} 平河内 毅 . . . 20

1 東久留米市 川岸遺跡

時代 旧石器時代、縄文時代、中・近世
遺構 石器集中部、礫集中部、炭化物集中部
遺物 斧形石器・ナイフ形石器ほか（旧石器時代）
キーワード 環状ブロック群、斧形石器、
後期旧石器時代前半期

調査概要

川岸遺跡は武蔵野台地のほぼ中央部、東京都東久留米市浅間町2丁目地内に所在します。今回の調査は、河川の氾濫被害に対応するための調節池建設工事に伴う緊急発掘調査として、令和元年（2019）8月から令和3年（2021）6月まで東京都埋蔵文化財センターが実施しました。調査の結果、後期旧石器時代の立川ロームⅨ層に伴う環状ブロック群、縄文時代前期後葉の土坑群を伴う集落跡、中世から近世にかけての屋敷跡など、多くの成果を得ることができました。今回の発表では、これらの成果のうち、旧石器時代の調査成果を紹介します。

本遺跡は、東久留米市域を源とする落合川と荒川水系新河岸川の支流である黒目川の合流部右岸に立地します。今回の調査区は遺跡の北半部、落合川旧河道に沿って形成された比高差約3mの崖を臨む北西側に張り出した台地上に位置します。遺跡が立地する段丘面は、武蔵野台地の段丘面区分では武蔵野面に相当し（第1図）、武蔵野礫層、武蔵野ローム層、立川ローム層が連続的に堆積していることが今回の調査で明らかとなりました。本遺跡では、このローム層のうち、立川ロームⅢ層からⅩ層を調査し、約13,000点の旧石器時代の遺物が確認されました。複数の層位から遺物が見つっていますが、特に大きな成果といえるのはⅨ層（約3.4万年前）を主体とする石器群です。

Ⅸ層からは、約3,700点の遺物が出土し、石器や礫などの遺物が密集して見つかる遺物集中部が複数確認されました。さらに調査区の北西側ではこれら遺物集中部が環状に分布することが分かりました（第2・3図）。このような分布は、環状ブロック群と呼ばれており、後期旧石器時代前半期（約3.8万年前～2.8万年前）の日本列島に特有な遺物分布です。都内での確認事例は少なく、この調査は貴重な事例といえます。本遺跡の環状ブロック群は、西側から北側にかけて

後世に削られて失われている可能性が高いですが、本来の規模は直径40mから45mほどと比較的大型であったと推定されます。さらに注目される点として、環状ブロック群に伴って、礫群が確認されたことが挙げられます。他の遺跡では環状ブロック群に礫群が伴うことは少なく、石器集中部と合わせて環状ブロック群の形成過程を検討できる重要な事例といえます。また、環状ブロック群の東側では小規模な石器集中部が、南側では弧状に連なる遺物集中部が検出されています。これらと環状ブロック群の関係性については、接合資料の分析を通じて検討する予定です。

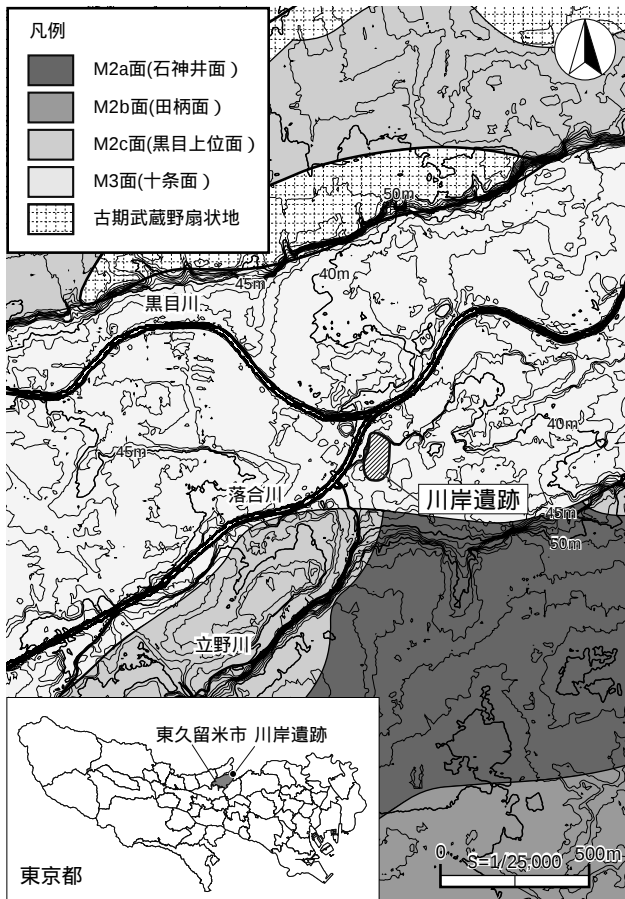
この環状ブロック群に伴う石器として、多数の剥片や石刃と共に、基部加工ナイフ形石器や台形様石器、斧形石器、削器などが見つかっています（第5・6図）。中でも注目されるのは斧形石器です。斧形石器は環状ブロック群に伴って検出されることの多い石器ですが、ひとつの遺跡からまとまった数が出土する例が少ない中、本遺跡からは、16点の斧形石器が確認されました（第4・5図）。刃部剥片や研磨痕のある剥片など関連遺物も多数出土しており、斧形石器と環状ブロック群との関係性を考える上で重要な資料といえます。

石器の石材には、遺跡近傍でも採取可能なチャートやチャートに伴うような頁岩・珪質頁岩類が最も多く用いられています。一方で、黒曜石や安山岩といった火山起源の石材や水晶、東北地方の珪質頁岩や千葉県南部の嶺岡山地で産出する珪質頁岩など、関東各地をはじめとして遠方の様々な産地の石材が利用されています。今後、黒曜石や水晶の産地同定分析を実施予定であり、その結果と合わせて、各石材の産地の解明や環状ブロック群内での石材の利用状況を検討していきます。

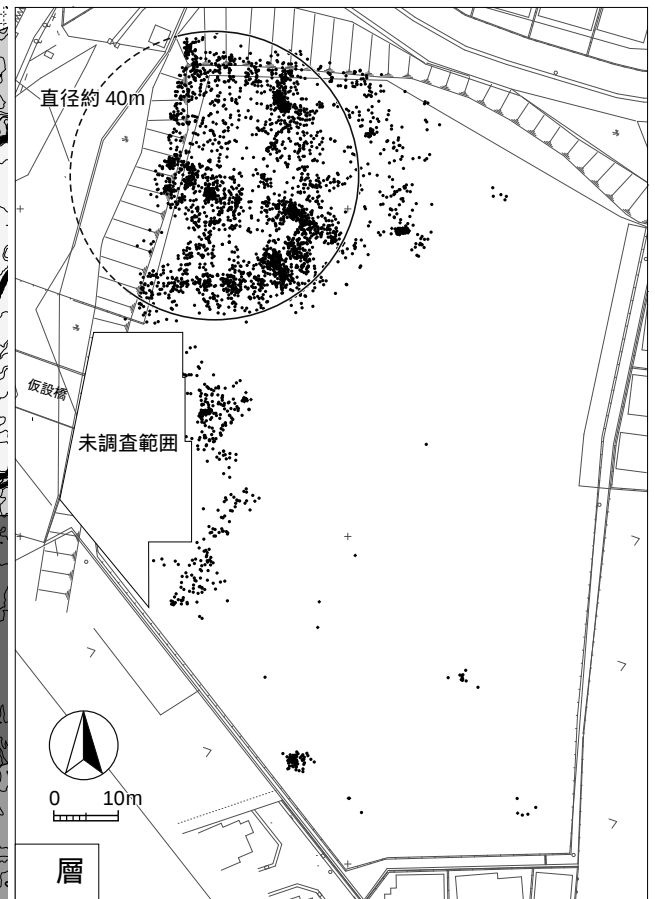
また、環状ブロック群に伴って炭化物集中部を3か所確認しています。これらの炭化物は放射性炭素年代測定や樹種同定分析を実施予定であり、その成果は、環状ブロック群の形成年代や当時の周辺環境を検討するための基礎資料として重要です。

これらの成果は、令和5年度に実施予定の仮設橋架設部周辺の追加調査の成果と合わせて、令和6年（2024）に報告する予定です。

大型環状ブロック群と多数の斧形石器



第1図 川岸遺跡の位置と周辺地形
(国土地理院基盤地図情報データ・遠藤ほか2019から作成)



第2図 立川ローム 層遺物分布図



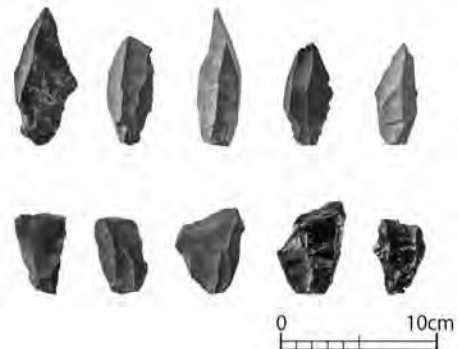
第3図 川岸遺跡環状ブロック群空撮(北西から)



第4図 斧形石器出土状況



第5図 斧形石器



第6図 ナイフ形石器と台形様石器

2 北区 十条台遺跡群南橋遺跡

時代 縄文時代、弥生時代後期～古墳時代初頭、
古代

遺構 住居跡、^{ほうけいしゅうこう}方形周溝墓、^{ほったてばしらたてもの}掘立柱建物跡、
^{ちゅうけつ}大型柱穴

遺物 土器、^{はじき}土師器、^{すえき}須恵器、石器、鉄器

キーワード 集落、方形周溝墓、掘立柱建物跡

調査概要

^{じゅうじょうだい}十条台遺跡群は、武蔵野台地東縁辺部を占める
^{ほんごうだい}本郷台に立地している遺跡群です。本郷台は河川な
どによる開析によってさらに小さな台地に分けられ
ていて、そのひとつが十条台です。十条台の上には、
^{みなみばし}南橋遺跡の他、^{かめやま}十条台古墳群、^{しゆく}亀山遺跡、宿遺跡な
ど多くの遺跡が残されており、それらは総称して十
条台遺跡群と呼ばれています。

今回の調査区は、東京都北区中十条一丁目に位置
し、十条台遺跡群の中でも南橋遺跡にあたります。
調査範囲の総面積は2,774㎡です。調査は、都営中
十条第1アパートの整備事業に伴う埋蔵文化財発
掘調査として、令和元年（2019）7月から令和2年
（2020）10月まで発掘調査を行い、令和2年（2020）
10月から令和4年（2022）6月まで整理作業を行
いました。

調査の結果、縄文時代、弥生時代後期から古墳時
代初頭、古代と、大きく3つの時代の遺構・遺物が
検出されました。特に弥生時代後期から古墳時代初
頭と古代の成果が多くを占め、これまでの調査成果
を補強するものとなりました。

縄文時代

^{どこう}4基の土坑を検出しました。土坑は形や深さなど
から、おそらく^{おと}陥し穴^{あな}として利用されたものと考え
られます。

また、縄文時代前期から後期の土器が出土しまし
た。遺構・遺物の数は少ないですが、縄文時代の幅
広い時代に人々が活動していたことがうかがえま
す。

弥生時代後期～古墳時代初頭

南橋遺跡における主たる時代のひとつです。調査
区から、住居跡101軒、方形周溝墓3基の他、柱穴
や土坑が検出されています。

住居跡は、前の住居を壊して次の住居を建ててお

り、家建て替えながら繰り返し居住していたと考
えられます。このため、多くの住居跡を検出するこ
ととなりました。

住居跡からは様々なものが出土しました。62号
住居跡では、炭化した住居の構築物が検出されまし
た。細い材を並べ、直交する材で束ねていたもの
で、屋根などに使用されたものと推定されます（第
1図）。113号住居跡では、^{たかつき}高坪の上に^{ひろくちつぼ}広口壺を重ね、
それが横転したと見られる出土状況を確認できまし
た。近くには小型の^{わん}埴もあり、三段に重なっていた
可能性もあります（第2図）。

方形周溝墓は、周溝のみを検出し調査を行いました。
1号方形周溝墓の周溝は推定で15mを超すと考
えられます。また、2号方形周溝墓の周溝からは大
型の壺形土器が出土しました（第3図）。

この他に注目されるのは、調査区の北東側から検
出された2基の大型柱穴です（第4図）。調査区内
では2基のみの検出にとどまりましたが、大型の掘
立柱建物が存在していたことが示唆されます。

古代

南橋遺跡のもうひとつの主たる時代です。調査区
から、住居跡12軒、掘立柱建物跡1棟の他、柱穴、
土坑などが検出されています。

住居跡は、1軒の住居を改築しながら住んでいた
ことが確認されており、人々が長く居住していたと
考えられます。例えば57号住居跡では、当初東側
に設けていたカマドを取り壊して、北側にカマドを
作り替えていることが確認されました（第5図）。

掘立柱建物跡は1棟確認されました（第7図）。
柱穴^{ほりかた}掘方の内部で何度か柱を建て直した痕跡が見ら
れ、掘立柱建物も繰り返し建て直して利用していた
と考えられます。

弥生時代後期から古墳時代初頭と古代のふたつの時代に集落が営まれた



第 1 図 62 号住居跡の炭化材出土状況



第 2 図 113 号住居跡の遺物出土状況



第 3 図 2 号方形周溝墓の遺物出土状況



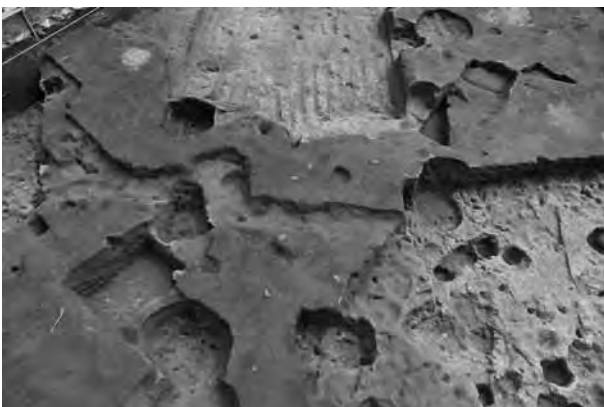
第 4 図 大型柱穴 (P92) の完掘状況



第 5 図 57 号住居跡の床面検出状況



第 6 図 57 号住居跡の遺物出土状況



第 7 図 1 号掘立柱建物跡の検出状況



第 8 図 出土した須恵器・土師器

3 足立区 花畑遺跡

時代 縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世

遺構 祭祀関連遺構（古墳時代）、竪穴住居跡

遺物 陶質土器・軟質土器、土師器、須恵器、石製模造品

キーワード 祭祀関連遺構、軟質土器

調査概要

花畑遺跡は、花畑五丁目・西保木間四丁目・保木間五丁目にまたがる範囲に所在する遺跡で、埼玉県との境をなす毛長川河岸に形成された標高約3mの自然堤防上に位置しています。出土した遺物・遺構は大半が古墳時代のもので、その時代に隆盛を見る遺跡です。古墳時代当時の毛長川の流路は、現在の花畑遺跡と区内最大の遺跡である伊興遺跡の間を南に入り込む形で流れており、両遺跡は毛長川を挟んで対岸に位置する地理的環境にありました。

花畑遺跡内の地域では、昭和の団地建設などの大規模開発や毛長川改修工事の際に、土師器・須恵器片をはじめ、土錘や土製鏡なども確認されていました。花畑遺跡では、現在までに4回の発掘調査が行われています。

平成5年（1993）から平成7年（1995）にかけて、下水道関連工事に伴った最初の発掘調査（以下、1次調査）が行われ、花畑遺跡の範囲がおおよそ明確になりました。その翌年、花畑遺跡のほぼ中央辺りに位置する保木間5丁目38番地内でのビル建設に伴う試掘及び拡張トレンチ調査で、当該番地内に遺構・遺物が非常に密に分布することが想定されるようになりました。平成25年（2013）にマンション建設計画に伴う発掘調査（以下、2次調査）が行われ、その計画が中止になると、同一敷地内で病院建設計画がたち、平成26年（2014）に2次調査の区画を四方に広げる形で発掘調査（以下、3次調査）が行われています。また、令和5年現在までに個人住宅建設などの小規模な敷地内の試掘調査が断続的に続いています。

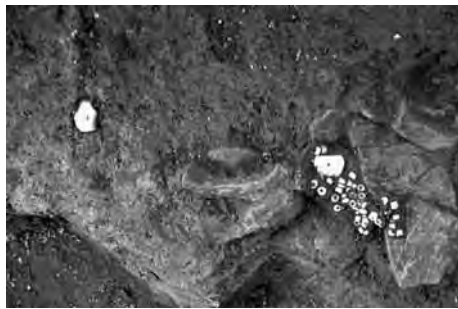
花畑遺跡の調査で、特筆すべき遺構は、焼土や炭化物の層が混ざり、大量の土器及び玉類が廃棄される形態の土坑です。1次調査で初めて検出されたこの土坑は、それまで伊興遺跡特有のものと思われていた祭祀遺構に類似し、この発見により伊興遺跡と同質の祭

祀が毛長川流域の遺跡で展開した可能性が示されました。

同様の土坑は2次、3次調査でも確認されていますが、中でも3次調査において、東地区の南半西寄りの付近から発見された258号土坑は祭祀行為の具体的様相を示す好事例となりました。258号土坑からは一括資料の土器及び玉類が出土しています。258号土坑内の底面には須恵器の大甕片が撒かれたように散在していましたが、土師器については、同一器種ごとにまとまり、完形に近い状態のものも多く見つかっています。当時の調査担当者である井上武氏は、これらの土師器は圧力により倒れて破砕したと考えられると報告しています。また、高坏の坏内に納められたかのような出土状況でまとまって発見された白玉と鏡形石製品も存在し、遺物の倒れた方向と遺物の出土状況から、廃棄した物というよりは土坑内に規則性をもって配置し、それがそのまま廃絶された状況が想定されるようです。これらの土坑から出土した土器は、古墳時代中期末～後期初頭頃と推定されています。

そして、これまでの調査において最も注目された遺物として、2次調査の際に出土した陶質土器と軟質土器があります。A区西南端から検出された古墳時代中期の49号落ち込みから陶質土器の有蓋高坏1点と、軟質土器の平底鉢2点がまとまって出土しました。陶質土器は3世紀後半に朝鮮半島で誕生し、4世紀後半頃に三国時代に入ると、陶質土器の形状は勢力圏の違いを反映するようになっていきました。酒井清治氏によると、まず陶質土器の有蓋高坏は形態的特徴から三国時代の加耶地域のうちの阿羅加耶の中心地、現在の咸安郡で生産されたものと考えられるとのことでした。また、軟質土器の平底鉢は製作技法と形態的特徴から現在の昌原市馬山で生産された可能性が高いとのことでした。朝鮮半島から渡来してきた遺物の多くは西日本での出土が多く、東日本での類例は少ないのが現状です。都内での軟質土器の出土はこの2点が初の事例であり、毛長川流域の開発の一端を渡来人が担った可能性を示す事例となりました。

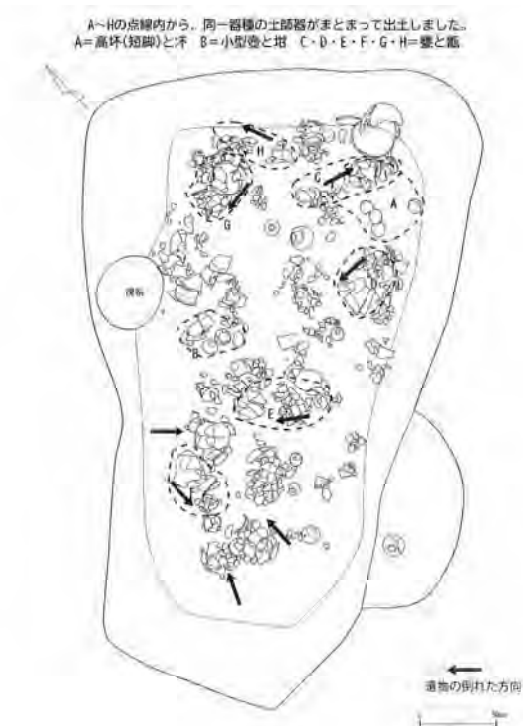
令和4年（2022）、2・3次調査現場に西接する敷地内において、4次目となる発掘調査が行われました。



第1図 高坏内の鏡形石製模造品と白玉



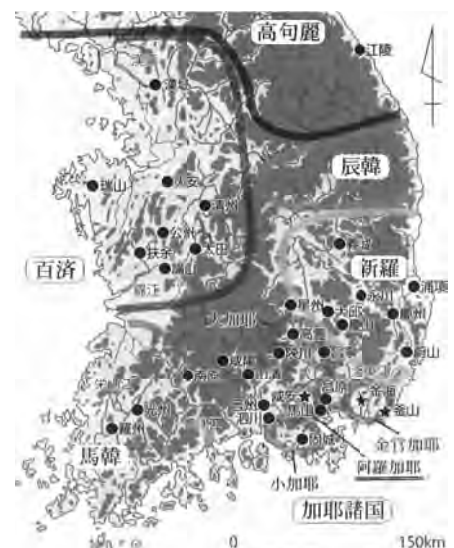
第2図 258号土坑全景



第3図 258号土坑内遺物分布図



第4図 保木間5 - 38番地周辺での発掘調査



第5図 5世紀前半の阿羅加耶の位置図



第6図 住居跡



第7図 韓式系土器(右と左が軟質土器)



第8図 H区12G - 1号土坑

4 板橋区 成増天神脇遺跡横穴墓群

時代 古墳時代、奈良時代

遺構 横穴墓（8世紀）

遺物 人骨（計8体以上）

キーワード 横穴墓 不時発見 しらこがわ 白子川流域（荒川水系）

調査概要

なります 成増天神脇遺跡横穴墓群は、板橋区の北西端に位置しており、荒川支流の白子川下流域の右岸台地縁辺に所在します。平成31年（2019）年4月、崖地の掘削工事中に不時発見され、計2基が確認されました。

1号横穴墓は玄室の平面形状が比較的整った長方形で、断面形状はアーチ形を呈しています。こぶし大ほどの自然石がほぼ全体に敷き詰められており、れきしょうめん 礫床面が形成されていました。前庭部はほぼ失われてしまいましたが、残存部分からは、へいそくせき 閉塞石と考えられる自然石の列がみられました。

2号横穴墓の玄室は胴張りで、隅が丸みを帯びた羽子板形です。天井が崩落した状態で発見されましたが、残存部分をみると、おくへき 奥壁は弧を描くように、緩やかに前傾する断面形状だったと考えられます。せんもん 羨門近くの礫床にはやや大きい礫が用いられており、前庭部では一部欠損している切石が確認されました。

出土人骨について

横穴墓の玄室から出土した人骨について、国立科学博物館人類研究部の梶ヶ山真里氏が分析した結果によれば、1号横穴墓からは5体、2号横穴墓からは3体以上の人骨が埋葬されていたことが明らかになりました。

このうち1号横穴墓では、1体の人骨が頭部を奥壁に向けており、しんてんそう 伸展葬を行っているとされる状態で検出されました。この人骨は壮年以降の男性であり、最終埋葬者であると考えられます。この壮年男性の推定身長は165cmであり、当時の関東・武蔵地方の古墳時代男性の平均より、比較的高身長かかつ体格が良かったとみられます。

そのほかの人骨は北側の隅に集骨されており、壮年男性の埋葬を行うため、「かたづけ」を行っていたのではないかと推察されます。これらの人骨は、

熟年男性・壮年女性・性別不明の青年と子供のものと判断されました。

これに対して、2号横穴墓で発見された人骨は、主軸に平行して3体が並んで埋葬されていました。南側の1体は壮年初期の男性で、うつ伏せの伸展葬と思われる状態で検出しました。中央の1体が青年女性、北側の1体が壮年男性と判断されました。

年代について

成増天神脇遺跡横穴墓群の年代については、前述した人骨のほかに出土遺物が無いため、築造時期については不明です。しかし、平面及び立面の規模を計測すると、とうしゃく 唐尺に基づく長さが多いことから、8世紀初頭頃に造られている可能性が考えられます。

成増天神脇遺跡横穴墓群と、ふきあげ 対岸に位置する吹上原横穴墓群（埼玉県和光市）の築造時期を比較すると、前者の方がやや後続するようにも推察できますが、吹上原横穴墓群の計9基のうち、成増天神脇遺跡横穴墓群に類似する形態をもつ横穴墓はみられません。しらぎん 新羅郡の設置より以前は、赤羽台横穴墓群（北区）と同じく豊島郡にあたることが想定でき、成増天神脇遺跡横穴墓群と赤羽台横穴墓群には、遺構の平面形態にやや共通点がみられます。

まとめ

以上の調査結果は、多摩川流域に比べて横穴墓の分布が少ない荒川流域における新たな事例として注目されます。区内の横穴墓の発見例が増加し、その存在がさらに周知されただけでなく、横穴墓の形態や構築された標高などの詳細な記録を得ることができました。

また、本遺跡出土の人骨も、荒川水系における貴重な古墳時代の人骨として、重要な情報をもたらすことが期待されます。

分布が少ない荒川下流域で、新たに発見された横穴墓



第1図 1号横穴墓平面図



第2図 1号横穴墓調査前状況



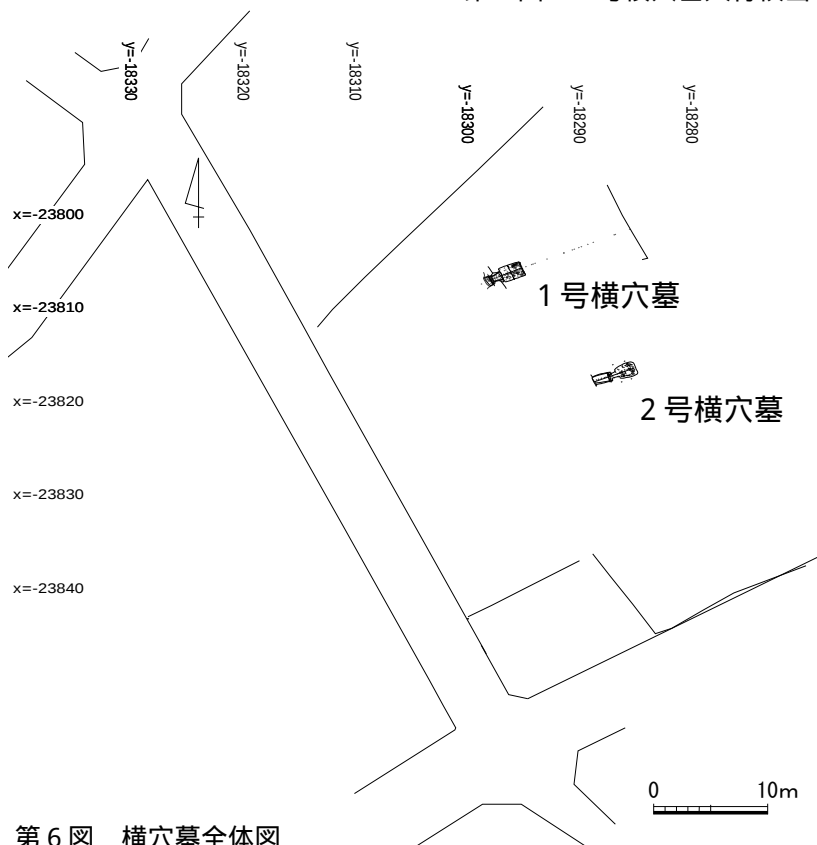
第3図 1号横穴墓敷石検出状況



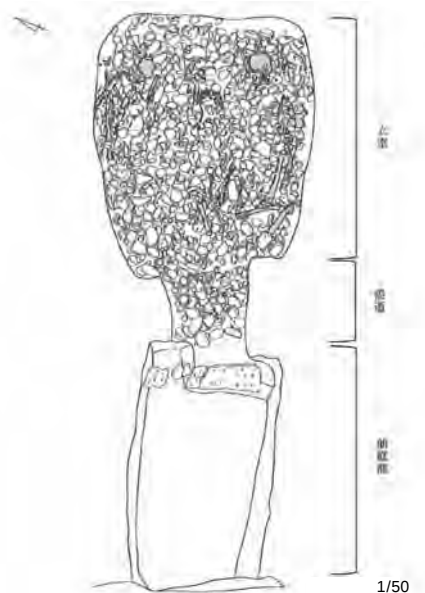
第4図 1号横穴墓人骨検出状況



第5図 1号横穴墓羨門・羨道



第6図 横穴墓全体図



第7図 2号横穴墓平面図



第8図 2号横穴墓人骨検出状況



第9図 2号横穴墓敷石検出状況



第10図 2号横穴墓羨門

公開講演『武蔵国分寺跡の史跡指定に尽力した郷土史研究者「稲村坦元」の事績』

いなむらたんげん

酒井 清治

はじめに

武蔵国分寺跡は大正 11 年（1922）10 月、「史蹟名勝天然紀念物保存法」により国の指定を受けました。東京府は「（武蔵国分寺跡が）実地調査を遂げ其の結果を報告し以て史蹟保存の主旨を徹底せんとす。」として、稲村坦元、後藤守一ごとうしゅいちによって翌年 3 月「武蔵国分寺址の調査」が刊行されています。武蔵国分寺は令和 4 年（2022）、国史跡指定から 100 周年を迎えました。

それでは、武蔵国分寺跡の調査、報告に関わった稲村坦元の事績を紹介しましょう。

1 稲村坦元の事績

（1）曹洞宗僧籍として

明治 26 年（1893）生まれで、明治 36 年福井県大野町洞雲寺どううんじにて出家しました。のちに岐阜県八幡町悟竹院稲村活元ごちくいんにつき嗣法かつぽんして、大正 15 年（1926）千葉県君津郡天神山村見性寺住職となり、昭和 45 年（1970）退隠します。昭和 41 年には曹洞宗大本山永平寺副監院かんにんに就きました。

（2）曹洞宗史を中心とした仏教史研究

大正 7 年、曹洞宗大学（現駒澤大学）卒業後曹洞宗研究生となり、東京帝国大学史料編纂官補鷺尾順敬わしお じゅんきょうにつき日本仏教史を専攻します。曹洞宗史料の踏査を重ねて、道元ほかの真蹟を世に出しその複製を『禅苑墨華』と題し大久保道舟ぜんえんと共に刊行しました。大正 15 年には曹洞宗宗典史料編纂委員会が設けられ事務をにないます。大正 5 年から昭和初年にかけて宗教関係の論考を発表し、『曹洞宗布教叢書』にも執筆しました。

（3）東京府（都）埼玉県における史跡・文化財の調査報告、自治体史執筆・編纂、文化財保存活動

稲村は、大正 10 年に東京府の嘱託、昭和 3 年には埼玉県の県史編纂主事となり兼勤に至ります。

【東京府】稲村は、大正 8 年の「史蹟名勝天然紀念物保存法」公布後に、東京府史蹟保存調査嘱託となり、大正 12 年後藤と共に編で「武蔵国分寺址の調査」『東京府史蹟勝地調査報告書』第 1 冊、続いて第 3・4・10 冊を刊行し、ほかの編者とも共編で 2・5・6・7・9 冊を刊行しました。

東京府の関連調査として大正 14 年、南多摩郡南村高ヶ坂こうがさか（現町田市）にて日本最初の敷石住居址を柴田常恵しきいし（48 歳）、後藤（37 歳）、稲村（32 歳）、森本六爾ろくじ（22 歳）などが発掘しました。これは、『東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第 4・5 冊に掲載されています。

昭和 18 年、政府による金属類回収に際し、都下および埼玉県内社寺所蔵重宝類の回収免除のための調査、および都内重要美術品などの疎開業務など、文化財の保護も担当しました。昭和 21 年には、文部省重要美術品調査員として進駐軍による刀剣回収につき、重要美術品該当作品の調査に従事しています。

昭和 30 年、都『文化財調査報告書』第 2 集で「武蔵野の青石塔婆あおいしとうば」を報告し、翌年都による都下・三宅島・御蔵島文化財調査が開始され、後藤と共に都の『文化財調査報告書』に伊豆諸島の社寺・史跡を報告しました。昭和 39 年 3 月東京都教育庁退職後も、東京都文化財専門委員として昭和 43 年～46 年まで西多摩地域の中世史跡、秋川流域の文化交流遺跡、葛西地区の史跡、荒川流域地区の史跡の調査・報告を続けました。【埼玉県】昭和 3 年、埼玉県が御大典記念事業として県史編纂を企画し、稲村は県史編纂主事（任）となります。秩父宮御台臨ごたいりんに際して柴田が川口市新郷貝塚しんごうを発掘しましたが、昭和 6 年にも柴田・稲村で県史編纂のための発掘を行っています。

昭和 4 年～6 年には、県史編纂史料収集に資するため柴田と共に編で『埼玉叢書』3 巻を刊行しました。柴田を監修として稲村は、昭和 6 年 12 月『埼玉県史』「第 2 巻奈良・平安時代」を発刊し、昭和 14 年まで『第 3 巻鎌倉時代』、『第 4 巻関東管領時代』、『第 5 巻江戸時代前期』、『第 6 巻江戸時代後期』、『第 7 巻近代』を順次刊行しています。第 1 巻は、考古学上の成果を期し未完でしたが、戦後の昭和 26 年に刊行し、翌年稲村は県史編纂嘱託の任を終えました。

昭和 17 年、東京都の水道貯水池候補として埋没せんとする埼玉県比企郡平村（現ときがわ町）を救うべく、文化財が富むことを説く『埼玉史談』特集号を刊行し、

文化財保護を目指します。

昭和 18 年、埼玉県史蹟名勝天然紀念物調査委員、昭和 21 年、埼玉県重要美術品調査、昭和 23 年、「埼玉県水害誌」編纂委員、文部省近世庶民史料地方調査員などを嘱され、昭和 32 年には、埼玉県文化財保護審議委員となり文化財保存活動に携わります。昭和 41 年には、多年の文化財保存調査の功績により勲四等瑞宝章を受けました。

(4) 郷土史研究会の運営と活動

稲村は、郷土史研究会の運営・育成に携わり投稿も行いました。武蔵野会(昭和 23 年武蔵野文化協会)、埼玉郷土会(昭和 25 年埼玉県郷土文化会)、浦和談話会、多摩史談会、日本郷土会、葛飾史談会などです。

中でも深く関わった埼玉郷土会は、県史編纂事務所と共に県立図書館内に設けられた組織です。総裁は県知事、会長は県内務部長、顧問を柴田、稲村は幹事(常任)・県史編纂主任として、『埼玉史談』を発行するなど県民協同の郷土史研究を推進しました。規則第三條に「本会は埼玉県内の史跡、史料、遺物などの研究及び保存を計り、愛郷の思想を養うを以て目的とす。」とあるように、地域郷土史の振興、文化財保護、啓蒙・普及活動を主導したといえるでしょう。

(5) 郷土史研究の執筆

稲村の執筆分野は、『埼玉史談』では①郷土史・文書・史料、②銘文・板碑(青石塔婆)、③人物、④建築・美術・彫刻、⑤名所・旧蹟の順に多く、郷土史、青石塔婆、社寺、人物、仏像が多い傾向にあります。

2 青石塔婆(板碑)研究

稲村は、昭和 4 年(1929)『東京府史蹟保存物調査報告書』第 6 冊で、東村山村徳蔵寺元弘供養塔婆、貞和青石塔婆を報告し、その後も青石塔婆の執筆を多く行っています。平成 11 年(1999)稲村坦元遺稿集として、青石塔婆(板碑)・仏像・古社寺とその資料をまとめられた『武蔵における社寺と古文化』が代表作です。また、稲村の注目される業績として、昭和初年に埼玉県下の地域研究者と「青石塔婆調査票」による資料収集を行ったことが挙げられ、その成果の一部は『埼玉史談』、『埼玉県史』に掲載されました。しかし、埼玉県教育委員会『埼玉県板石塔婆調査報告書』には活用されていません。

千々和到は、昭和 6 年(1931)～13 年までに調査した「青石塔婆調査票」が地域に密着した研究者の調査成

果で、原所在地や出土場所、発掘状況などが詳しく書き込まれており、重要な史料価値があると指摘しました。この「調査票」を調べると、青石塔婆は 3,012 枚を数えます。その後、千々和の尽力によって平成 5 年、『青石塔婆調査票集成—昭和初年の板碑調査』として^{たかしな}高科書店から刊行されましたが、高科書店が閉鎖されたため、一般に流布していません。所蔵館は、管見によれば国立国会図書館、国文学研究資料館だけで、東京都・埼玉県内の図書館には所蔵されていないため、身近な活用が難しいことが残念です。

3 柴田常恵、後藤守一、考古学との関わり

大正 8 年(1919)に「史蹟名勝天然紀念物保存法」が公布され、柴田は内務省地理課嘱託で考査員(官)、稲村は後藤と東京府史蹟保存調査嘱託として、業務上の接点がありました。稲村は大正 10 年 2 月に嘱託となり、帝室博物館で後藤や高橋健自に指導を受け、実物実見や、調査の同道で考古学の知識を深めたようです。博物館監査官補であった後藤は、大正 11 年 4 月に府嘱託となり、10 月から武蔵国分寺址の調査に入り、稲村は寺跡の実測調査、後藤は瓦の調査を行い、翌年報告書を刊行しました。大正 14 年には、稲村、柴田、後藤、森本が南多摩郡高ヶ坂を発掘し、その後稲村は、後藤と都文化財専門委員として、昭和 30 年(1955)前後に西多摩郡、伊豆諸島の調査を行っており、昭和 25 年には日本考古学協会員になっています。

稲村は、柴田の推薦により埼玉県史編纂に携わり、昭和 4 年、入間郡高麗村石器時代住居跡を発掘し、昭和 6 年には、川口市新郷貝塚を柴田と共に県史編纂事業として発掘しました。県内の古墳調査には後藤が委嘱され、昭和 7・8 年頃に、石田茂作、柴田、稲村で古寺址研究会を作り古寺を踏査しています。

おわりに

稲村は僧職にあり、仏教史料調査・研究により仏典に精通し、東京府(都)・埼玉県での史蹟など文化財の保存に携わり、郷土史研究先駆者の 1 人として、郷土史の振興、啓蒙・普及を主導しました。

5 国分寺市 武蔵国分僧寺跡 - 北方・推定中院地区 -

時代 奈良・平安時代

遺構 掘立柱建物、伽藍地区画溝

遺物 須恵器、瓦、鍛冶関連遺物

キーワード 史跡整備・事前確認調査

調査概要

国分寺市は、武蔵国分僧寺伽藍中枢部の北西に広がる北方・推定中院地区で、史跡整備のための確認調査を令和2年度に実施しました（第1図）。同地区では過去に6地点で調査が行われ、中枢部北西隅部を遮蔽する築地塀・掘立柱塀・溝のほか、古寺院地区画溝・伽藍地西辺区画溝、さらには掘立柱建物と竪穴住居が2棟ずつ発見されています。

このうち西側の掘立柱建物（SB39）は、梁間2間（2.8m）×桁行4間（7.8m）の身舎の西側に大型土坑を伴い、土坑と柱の境には延長5.5mにわたり瓦を6～7段（高さ約40cm）積み上げた側壁を配し、東側の柱筋上に須恵器大甕を埋設した特殊な建物です（第2図）。一方の東側建物（SB91）は、身舎が梁間2間（5.6m）×桁行9間以上（27.0m）におよび、東西両面に廂を有する南北棟の大型長舎建物です（第3図）。古代東国の掘立柱建物は梁間2間×桁行2～3間が平均的な規模のため、5間以上の桁行を持ち、そのうえ廂が取り付く点で、SB91は格式が高い建物であるといえます。どちらの掘立柱建物も過去の調査で存在は把握していましたが、将来的に復元整備するため再調査を行うことにしました。

まず、SB39の瓦側壁は昭和48年（1973）の下水道管敷設工事中に不時発見され、当初は僧寺西辺を画する築地塀である可能性が浮かびましたが、3年後に行った発掘調査で掘立柱建物と大型土坑に挟まれた側壁と判明します。当時の調査所見によると、建物の柱穴には新旧2時期あり、古い1時期目に大型土坑・瓦側壁・須恵器大甕が伴い、2時期目になると黄褐色粘土を敷いた「土壇状遺構」上に建物は建て替えられますが、大型土坑と瓦側壁は2時期目にも継続して使用され、出土した遺物から建物の年代は9世紀中頃～10世紀中頃と捉えられました。また、周辺一帯は崖線下の湧水の通水道にあたるため、建物の性格は「水に関わる何らかの施設」で、さらに建物南側を東西に走る溝から多量の鉄滓や轆の羽

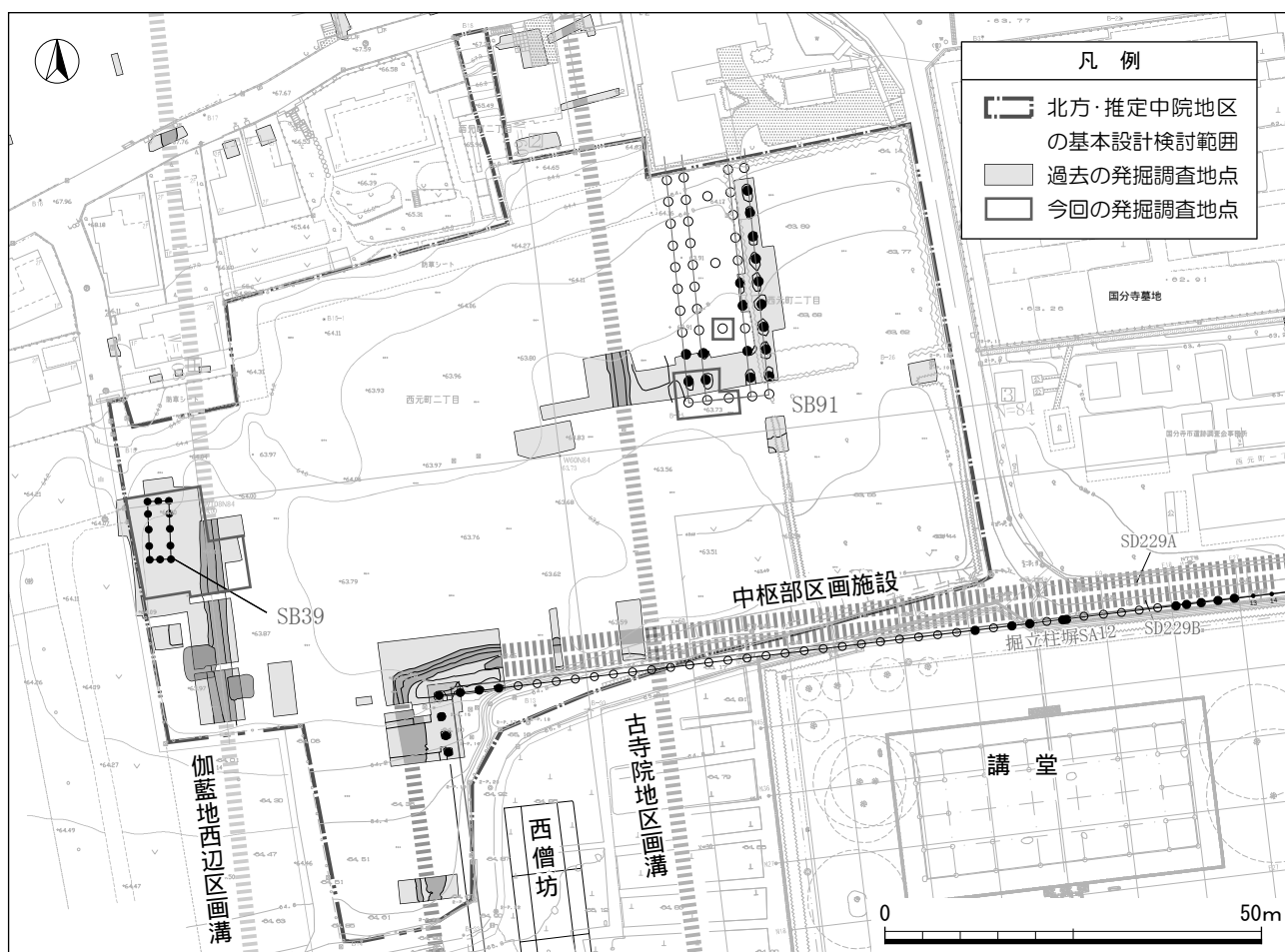
口が出土することから、SB39の直下には未調査ながら国分寺創建期段階に遡る鍛冶関連遺構が存在するであろうことが予測されました。

ところが、再調査で土層を改めて詳細に観察すると、柱穴に据え直した形跡は無く、土壇状の高まりも認められず、結果的にはSB39は黄褐色粘土を貼床した1時期の建物であるとの認識に至りました。また、埋設された須恵器大甕や側壁に使用した瓦は南比企窯跡群産の国分寺創建期段階の製品で、さらに鍛冶関連遺物も建物周囲全体に分布がおよんでいるため、建物の年代や性格は8世紀の鍛冶工房である可能性が考えられました。

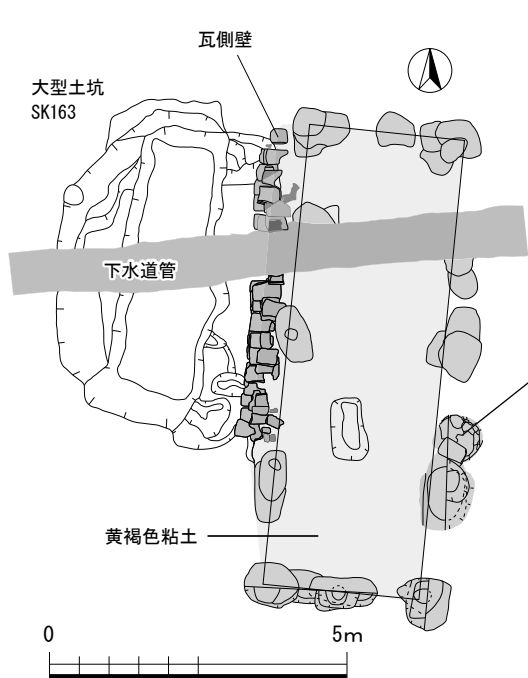
次にSB91は、昭和63年（1988）の調査で建物東側と南側に並ぶ柱列の一部を検出しました。柱穴の掘り方は長さ2.0m×幅1.2～1.4mの長方形を基調とし、深さ約1.0mの柱穴に据えられた柱痕は径40cm前後の太さで、一部の柱穴には2～3時期の建て替えを伴うことが観察されています。また、桁方向の柱間は3.0mの等間隔、梁間は身舎部で2.8m、身舎一廂間で2.4mを有します。建物はさらに北側へ延び、対する史跡公有地に含まれる南側は追究が不十分であったため、当時の調査範囲と一部重複させるかたちで建物南西側に調査区を設定しました。

その結果、ここでも昭和48年（1973）に敷設した下水道管が東西に横切り、その埋設管で並列する柱穴3基が串刺し状に壊されている状態で検出されましたが、柱穴はさらに南側へは展開せず、発見された柱穴列がSB91の南端を示すものと判断されました。

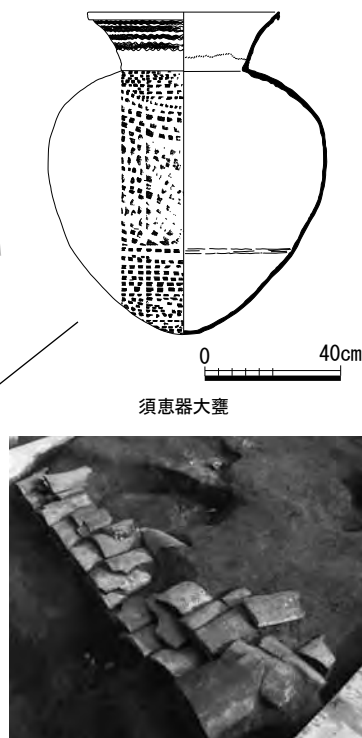
古代寺院で、このような長舎建物といえば僧坊が思い浮かびます。調査区から南西に約50m離れた墓地区内には礎石が点在し、大正11年（1922）に東京府が行った実地踏査で僧坊に比定されています（現在の西僧坊）。SB91は掘立柱建物ですが、礎石建て西僧坊の前身建物である可能性を鑑み、調査区の北東側に追加で小トレンチを設定したところ、柱穴が明瞭に検出されました。仮にSB91が梁間2間×桁行3間で1房を構成し、5房が連結する長屋状の建物と想定しますと、僧寺東僧坊や尼寺尼坊とほぼ同規模・構造の建物に復元できます。今後、他国の国分寺の事例と比較しながら検証を進めて参ります。



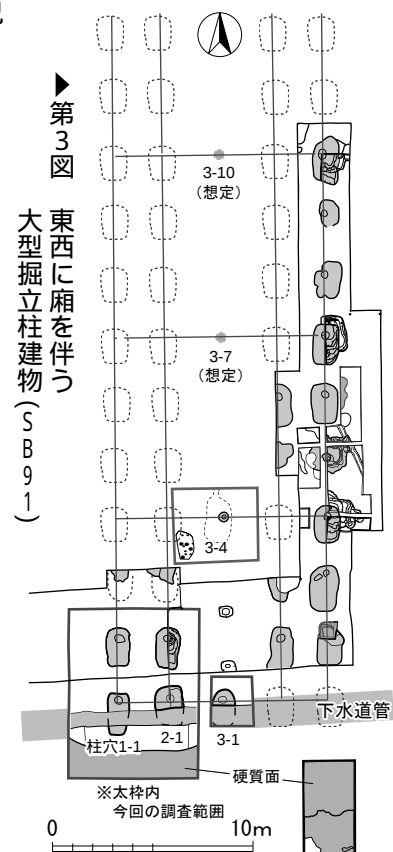
第1図 僧寺北方・推定中院地区の調査状況



第2図 大型土坑・瓦側壁を伴う掘立柱建物 (SB39)



第4図 SB39 瓦側壁



6 江戸川区 上小岩遺跡

時代 弥生時代～古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世、近代

遺構 方形周溝、ほうけいしゅうこう 竪穴建物跡、たてあなたてもの 掘立柱建物跡、区画溝、井戸、土坑、ピットなど

遺物 土器、土師器、須恵器、陶磁器、木製品、金属製品

キーワード 低湿地、こうわり 甲和里、中世村落

調査概要

上小岩遺跡は江戸川西岸の微高地上に位置する弥生時代から近代にかけての複合遺跡です。対岸には下総国府跡があり、8世紀前半の正倉院文書にみられる「甲和里」比定地として知られています。

昭和20年代から実踏調査が開始され、現在に至るまで発掘調査が実施されています。

令和2年度から区立小学校の校舎新築工事に先立つ発掘調査を実施しており、現在は小学校校庭部分の発掘調査報告書を作成しています。

弥生時代～古墳時代

不整形の3条の溝が巡る方形周溝、土坑を確認しました（第1・2図）。方形周溝は後世に削平を受けており、方形周溝墓もしくは方形に溝を巡らせる建物跡であったと考えられます。当該期の出土遺物として土器、漁網の土錘、装身具の耳環が出土しています。

奈良・平安時代

竪穴建物跡、土坑、ピットなどを検出しました（第3図）。建物跡は削平を受けており、方形に巡る周溝の一部と柱穴痕のみ遺存している状態で、周辺から住居内での煮炊きに用いられた土製支脚が出土しています。

また竪穴建物の北側にも複数のピットが発見され、さらに多くの竪穴建物もしくは掘立柱建物が存在していたと考えられます。

出土遺物は主に7世紀代から8世紀前半頃の遺物が主体で房総半島、北関東などの土器に加えて東海地方や筑波山南麓の地域、北関東などの須恵器、鉄鍬が出土しました。さらに竪穴建物跡北側の遺物集中部などから、被熱した多孔質の砂岩が複数出土しました。同様の資料は東京都八王子市神谷原遺跡、埼玉県川島町富田後遺跡からも出土し、研究者から

せいえん 製塩による副産物の可能性が指摘されています。

中世

中世の主な遺構として、溝状遺構や土坑、井戸跡、ピットを発見しました（第6・7図）。

注目すべき成果として、調査区中央部から南側にむけて屈曲する溝状遺構を検出しました。この遺構の役割として、溝の内外を区画し、生活空間を生み出すことが想定されています。出土遺物から15世紀後半には埋没したと考えられます。同様の遺構は葛飾区上千葉遺跡、板橋区舟渡遺跡のような東京低地東部の他地域においても確認されています。

中世の出土遺物は15世紀後半のものが主体ですが、中国大陸からもたらされた12世紀末から13世紀前半の青磁や白磁などの磁器、東海地方の陶器や在地の瓦質火鉢、14世紀代の紀年銘をもつ板碑片が出土しています。

近世

畝間などの耕作跡、溝状遺構、井戸跡、土坑を検出しました。これらの遺構は出土遺物から17世紀前半、18世紀後半から幕末頃のものと思われます。

近代

明治15年（1882）に設置された小学校に^{すずり}関わる硯^{ろうせき}や蠟石、陶器などが出土しました。

また調査対象ではありませんが、木組みの遺構から1930年代後半の玩具、記章、文房具が出土しました。これらの資料は学校と協議のうえ、新築校舎において戦前の学校史に関わる資料として展示を行うこととしました。

調査の成果

この学校用地内の大きな成果のひとつとして、従来は文献から存在が指摘されていたものの、少数の事例に限られていた古代集落に関連する遺構と遺物を数多く発見したことです。また竪穴建物跡は本区で最初の発見例となりました。

そして古墳時代の方形周溝も本区で最初の発見例として注目されます。

さらに中世の溝状遺構による15世紀後半の生活区域の発見は、同時代の文献資料では確認できなかった当地域における中世集落の存在を裏付けるものとなりました。



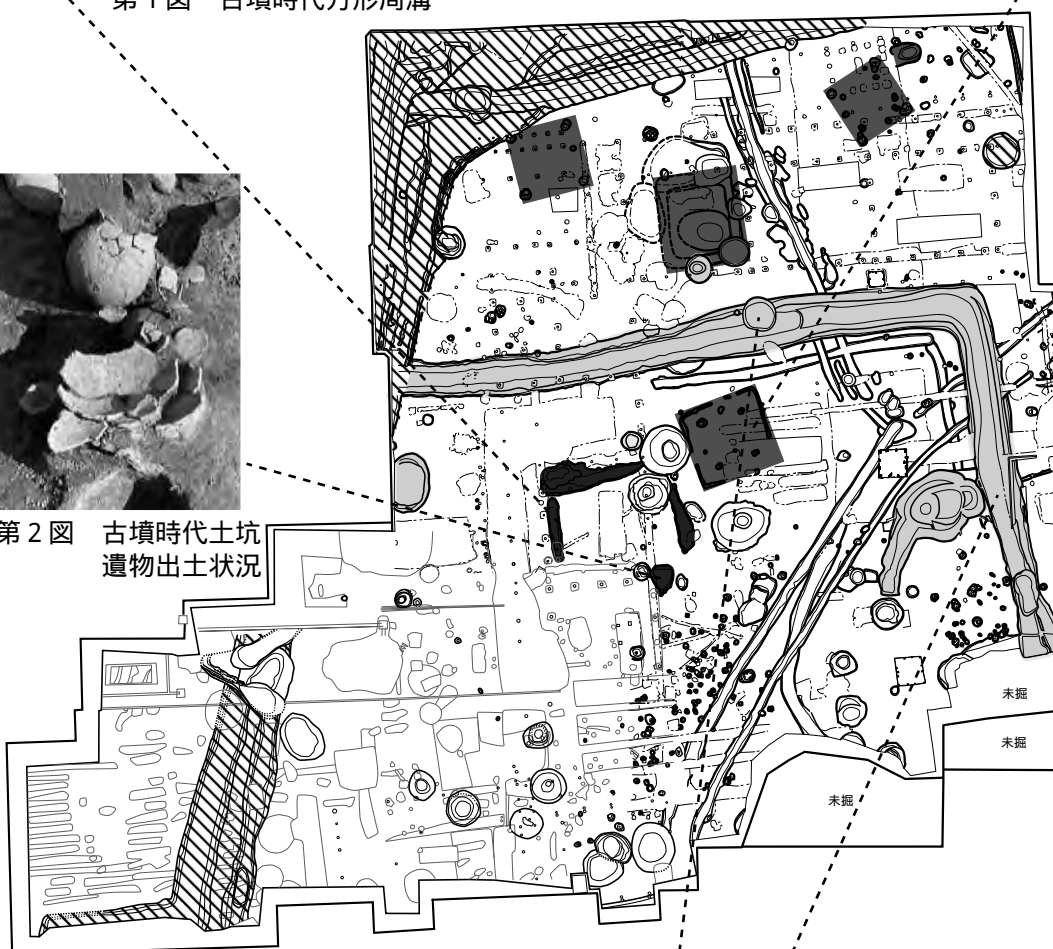
第1図 古墳時代方形周溝



第3図 奈良時代竪穴建物跡全景



第2図 古墳時代土坑遺物出土状況



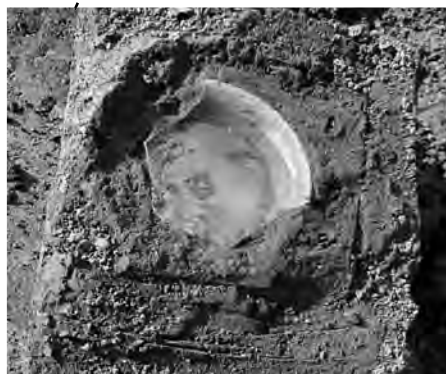
第4図 上小岩遺跡区立小学校地点遺構配置図



第5図 紀年銘のある板碑片



第6図 中世土坑遺物出土状況



第7図 中世溝状遺構遺物出土状況

7 新宿区 納戸町遺跡

時代 縄文時代、近世

遺構 掘立柱建物跡、礎石建物跡、井戸跡、溝跡、
埋桶跡、地下室、土坑・ピットなど

遺物 縄文土器、陶磁器、瓦、金属製品、ガラス製
品、石製品、骨角貝製品

キーワード 鷹匠組屋敷、旗本・御家人屋敷

調査概要

納戸町遺跡（新宿区 No.120）は、武蔵野台地東端部の淀橋台と呼ばれる台地上に立地します。南にはかつて紅葉川という名の川が流れており、四ツ谷から飯田橋にかけての江戸城外堀は、主にこの川の水を貯めることにより造られました。この外堀から北西側に長延寺谷が延び、市谷台の地形を形成しています。今回の調査地点は、この長延寺谷を南に臨む台地の縁辺部にあたります（第1図）。

本地点の調査は、江戸時代の武家屋敷に関わる遺構と遺物が主体でした。江戸時代において、本調査地周辺は大名屋敷、旗本・御家人屋敷や組屋敷などの武家地、町屋、寺社地が混在していました。

寛文12年（1672）の絵図によると、この辺りは鷹匠頭・戸田七之助の組屋敷でした。絵図と近年の空中写真を見比べると、遺跡の目の前を通る鼠坂とそれに続く通りは現在とほぼ一致しており、この頃からある古い道であることがわかります（第2図）。江戸三大仇討ちの一つとされる「浄瑠璃坂の仇討ち」がこの辺りで起こったのは、ちょうどこの頃です。その後、元禄9年（1696）までには旗本・御家人の拝領屋敷地へと変わり、幕末までほぼ同じ土地利用がなされました。

鷹匠組屋敷の時期

地下室（穴蔵）には、17世紀中葉～後葉に位置づけられるものがあります。第7図は「フラスコ形」（第5図も参照）を呈し、底面付近からイヌの全身骨格が出土しました。ほっそりとした獵犬型のイヌで、「洋犬」と思われます。首から頭の部分をみると、頭が捻じれていることがわかります。その頭を安置するために壁の一部が掘り窪められています。

鷹匠は、鷹狩りに使う鷹の飼育・訓練を行い、実際の鷹狩りに従事するとともに、獲物を見つけ追い立てるイヌも飼育していました。このイヌは、まさに

そうした「鷹犬」だったのかもしれませんが。負傷し、死んでしまった「相棒」を丁寧に埋葬したのでしょう。

旗本・御家人屋敷の時期

今回の調査範囲は、旗本・御家人の拝領屋敷地の概ね一区画（時期によっては二区画）分に相当します。調査区の南西―北東、北西―南東に走る溝跡はその区画を示すものと考えられます（第3・4図）。

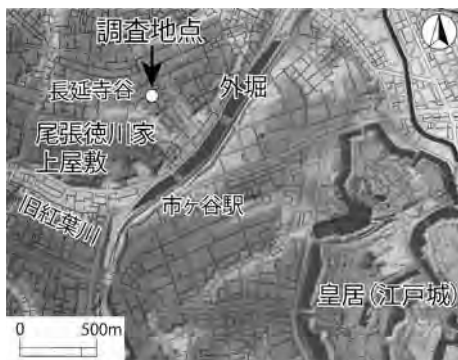
前述した地下室は江戸の収蔵施設の代表格ですが、今回の調査ではそれに加えて土蔵跡（礎石建物跡）も検出されました。第6図では、底部に大量の瓦片を敷き詰め、その上にロームとイモ石を層状に突き固め地盤を強化した版築として認められました。土蔵の建築・維持費用は地下室に比べて高価でした。ここに屋敷を構えた旗本・御家人が、比較的裕福だった可能性があります。

そうした暮らしぶりは、遺物からもうかがえます。土瓶や涼炉などの喫茶具、硯や水滴などの文房具が数多く出土するとともに、軟質陶器の皿（乾山焼）やガラス製品（坏、簪）といった希少な遺物も見られます（第8図）。まさに、文人趣味を楽しんでいた様子うかがえるのです。

さらに、明治時代の遺構からは、禁裏様式の範疇で捉えうる碗と皿が出土しました（第9図）。これらには九条菊紋が配されています。また、下がり藤紋も認められ、五撰家の一つである一条家の家紋と考えられます。明治天皇の皇后である昭憲皇太后は一条家の出身です。したがって、これらは天皇家から下賜された可能性が想定されます。皇室にゆかりのある者だったのかもしれないですし、あるいは道具商を介して手に入れたのでしょうか。いずれにせよ、明治に入ってここに屋敷を構えた人も、ただ者ではなかったようです。

調査の成果

今回の調査では、鷹匠や旗本・御家人の暮らしぶりがうかがえるとともに、前者から後者への屋敷地の移り変わりを知るための成果が得られました。大都市・江戸における様々な階層の人々の生活と社会と文化を探るための貴重な基礎資料になると思われます。



第1図 調査地点
(国土地理院「基盤地図情報」・「基盤地図情報数値標高モデル」を元に「基盤地図情報ビューア」で出力)



第2図 御府内往還其外沿革図書十一(延宝年中)部分¹と調査対象周辺の空中写真²

¹ 国立国会図書館ウェブサイトより転載したものに加筆

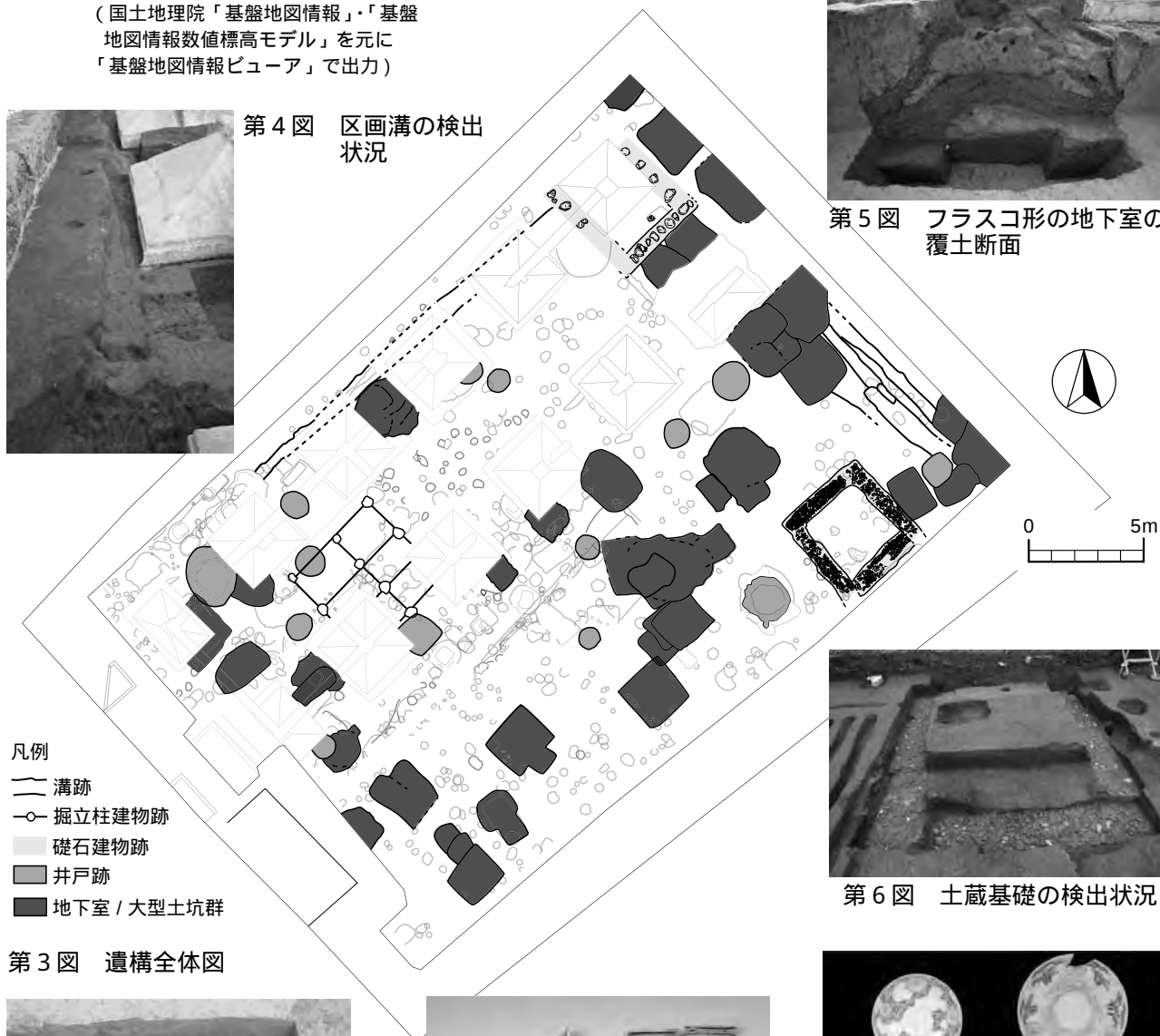
² 国土地理院撮影の空中写真に加筆



第4図 区画溝の検出状況



第5図 フラスコ形の地下室の覆土断面



第3図 遺構全体図



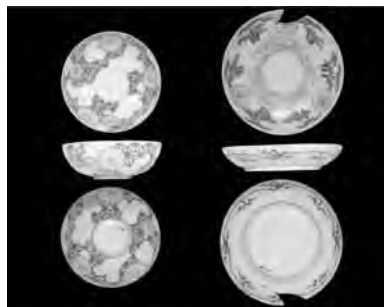
第7図 地下室から出土したイヌの全身骨格



第8図 軟質陶器の皿



第6図 土蔵基礎の検出状況



第9図 禁裏様式の碗と皿

8 国分寺市 中藤新田分水跡（胎内堀）

時代 近世、近代

遺構 分水・水路、開渠・胎内堀・暗渠、醤油醸造所、蚕室

遺物 近世以降の陶磁器、明治期水閘土管、近代瓦、近現代ガラス瓶・缶、縄文土器、縄文石器

キーワード 玉川上水、新田開発、農村

調査概要

中藤新田分水は現在の国分寺市北西部に位置し、中藤新田のほか平兵衛新田・榎戸新田・野中新田宇高木組（六左衛門組）・戸倉新田・砂川前新田が利用していました。

市は令和元年度に国分寺崖線の上に広がる樹林地の寄附を受け、樹林地に隣接する中藤新田分水跡を歴史遺産として保存・活用する方針を策定しました。これに基づき、令和3年度に市教委は中藤新田分水の地下レーダ探査・発掘調査・聞き取り調査のほか、明治期操業の醤油醸造所の建造物調査を実施しました。

調査地は立川市境に近い国分寺市西町四丁目の国分寺崖線の段丘上に位置し、標高は約92mです（第1図）。この周辺は中藤新田と呼ばれ、西町五丁目から視認できる国分寺崖線が南東方向へのび、崖線沿いの麓に旧家屋敷地が並んでいます。屋敷地は主屋・長屋門・蔵・蚕室・醤油醸造所などで構成され、崖線の上に屋敷林や畑地が広がっています。分水は崖線上を流れ、崖線下へ分岐させた水を旧家では使用していました（第2図）。

寛政3年（1791）に幕府普請奉行の石野遠江広通が記した『上水記』によると、享保14年（1729）に願済された中藤新田分水は、砂川新田地先の羽ヶ下（立川市幸町四丁目付近）から呑み用水として引かれました（第1図①）。分水口の大きさは高さ壹尺×幅六寸で、木材の腐食などにより定期的に交換しながら利用していました。しかし慶応3年（1867）に南野中新田分水が交差することとなったため、水が中藤新田に入らなくなり、翌慶応4年（1868）に胎内堀を掘削することとなりました（第1図②）。胎内堀はこの騒動の際、中藤家文書に記された用語で、トンネル状水路を指します。

発掘調査では全区で開渠堀、A・C区で胎内堀という新旧2本の水路が確認されました（第3～5図）。

開渠堀 開渠堀の壁面は底面よりA区で0.5m、C区で0.75m垂直に立ち上がり、その後1.0mほどやや外傾し、最後は緩やかに開く形状です。上部から中部にかけての形状と

下部では大きく異なることから、下部は堀の開削より後の時期に掘り下げられた可能性が高いことがわかりました。堀の覆土は複数回に分けて締め固められていましたが、全体的に耕作土由来の均質な土であることから一度に上部まで埋めたと考えられます。A・C区間では北側から南側にかけて100mの距離に対し、0.1mの勾配が付けられています。

胎内堀 A区胎内堀の断面形上部は円形に近いかまぼこ型で、断面形底部は幅0.45m、深さ0.25mで断面は逆台形を呈していました。覆土内のウイスキー瓶、一升瓶などから、胎内堀が埋められたのは1970年代と推定できます。C区胎内堀の断面形も上部は円形に近く、底部は幅0.53m深さ0.23mの逆台形で、いわゆるマッシュルーム形をしています。A・C区間で100mの距離に対し、0.4mの勾配が付けられています。当初の予想に反し堀底面の標高は開渠の堀に比べてわずかに約0.3～0.6mほど低い位置にあったことから、新たに両者の位置関係を模式化しています（第6図）。

またC区では胎内堀壁面東側に5箇所、西側に3箇所に灯明などを設置するための窪みが見つかりました。

なお、第5図の開渠堀上に見える堅穴を断ち割ったところ、現地表面から2.1mの深さで名主の中藤家、平兵衛新田へと分水するための水路を確認しました。両水路の位置関係などから、①開渠掘削②開渠埋戻し③堅穴掘削④胎内堀掘削の順であることが判明しました。

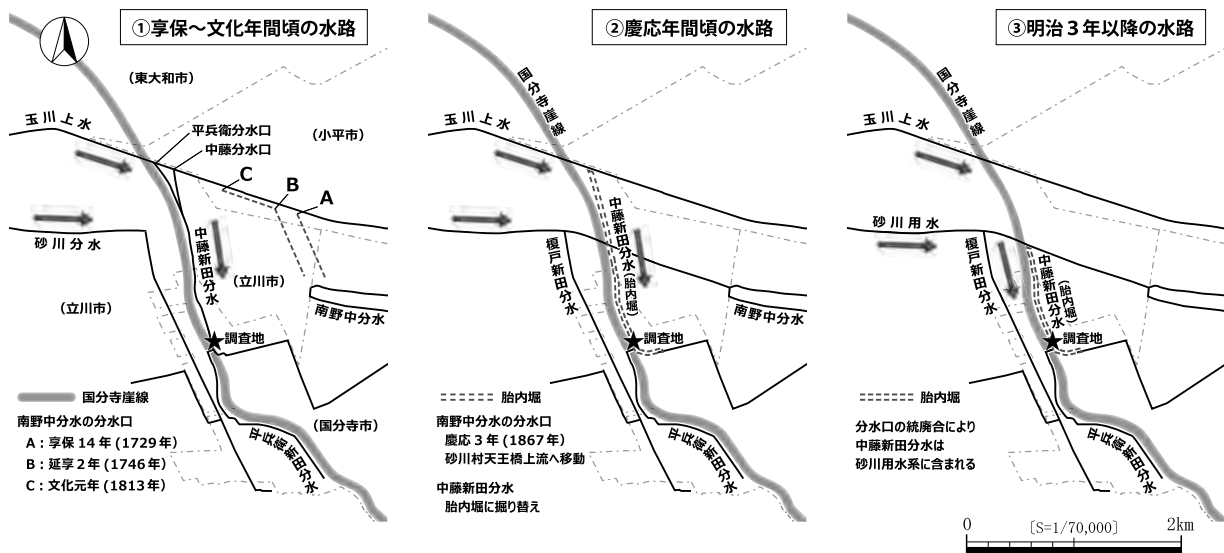
遺物 遺物は近世から昭和にかけての屋根瓦、陶磁器や洋酒瓶、碇子、日用品が多く見られました。分水利用にかかる遺物としてはB区で20世紀初頭から半ばの常滑製の水閘土管、C区では一升瓶が出土しました。遺物からは昭和40年（1965）頃通水が終了したとみられます。

醤油醸造所 調査地南端の屋敷地内には、明治期創業で近年まで営業していた市内唯一の木造平屋建・切妻造・セメント瓦葺の醤油醸造所跡が現存しています。敷地内には分水を引き込んだ水路跡が残っています。

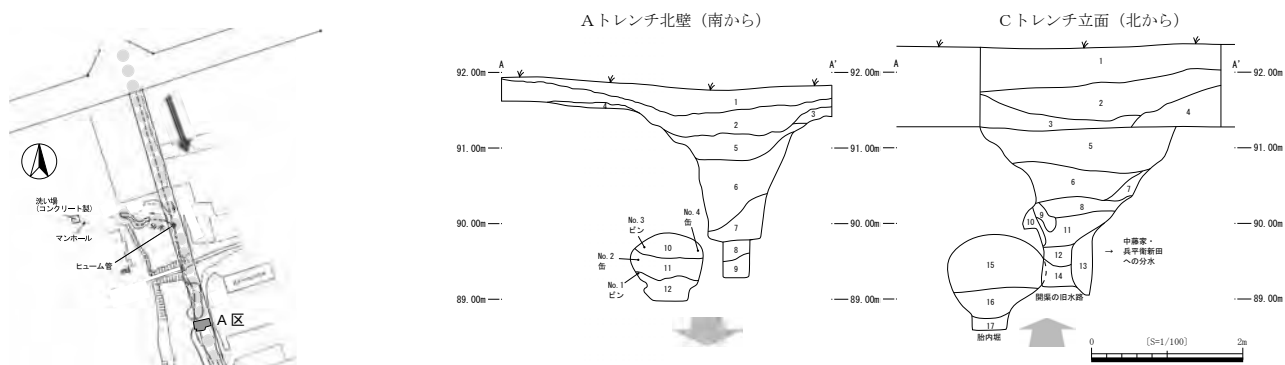
蚕室 寄附地周辺の屋敷地内には、市内で現存する唯一の養蚕専用建物があります。この蚕室は総2階で規模が大きく、現在でも機織機など養蚕にかかる民具が多く残されており、地域産業として貴重な資料です。

調査成果 調査地全体にわたり新旧2本の水路が良好な状態で残されていることが判明したため、歴史的変遷や経緯がわかる貴重な土木遺産として、市教委は令和4年（2022）9月に市重要史跡に指定しました。

玉川上水から引水した幕末から明治初期のトンネル状水路



第1図 調査地点の位置と中藤新田分水（胎内堀）の変遷概念図



第3図 A区・C区の胎内堀と開渠堀



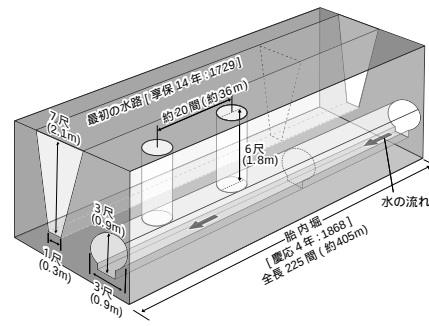
第2図 調査全体図



第4図 A区全景（南から）



第5図 C区全景（北から）



第6図 中藤新田分水模式図

紙上発表 港区 国史跡旧新橋停車場跡及び高輪築堤跡

時代 近代

遺構 石垣、群杭、橋梁橋台部、信号機跡

遺物 陶磁器（汽車土瓶など）、石製品、金属製品、
双頭レール、木製品、チェア付枕木

キーワード 日本最初の鉄道遺構、海上の築堤

調査概要

1 史跡の位置と概要

史跡旧新橋停車場跡及び高輪築堤跡は、平成8年に史跡に指定された旧新橋停車場跡と、令和3年に追加指定された高輪築堤跡の2遺跡で構成されています。旧新橋停車場は明治5年(1872)に新橋－横浜間に日本で初めて鉄道が開業した際の始発駅であり、その周辺は江戸時代の埋め立てにより大名屋敷があった場所で、その広大な土地が鉄道用地として転用されました。一方、高輪築堤は鉄道用地として転用可能な土地が用意できず、海の上に堤を築くことで線路を通していました。高輪築堤の位置は本芝から八ツ山下（芝一丁目から JR 品川駅の南側）までの間で、総延長は約 2.7km でした。この海上築堤は多くの錦絵に描かれ、新橋停車場とともに文明開化の象徴として人々に親しまれました。しかし、高輪築堤は明治5年の鉄道開業から半世紀ほど後、東京湾の埋め立てと品川駅の拡張により次第に姿を消してゆき、その後の開発などで滅失したものと考えられていました。ところが、平成31年の品川駅改良工事で高輪築堤に伴う石垣が見つかったことをきっかけに、堤の盛土や石垣などが南北に良好な状態で残っていることが分かり、現在も本格的な発掘調査が実施されています。

2 旧新橋停車場跡

旧新橋停車場跡は汐留遺跡の一部として平成3年から本格的な発掘調査が行われ、すでに上屋は失われているものの、駅舎やプラットホームの基礎が良好に残存していることが明らかとなりました。いずれも堅牢な基礎工事を行っており、駅舎とプラットホームではそれぞれ石の積み方が異なることが分かっています。これらの基礎の一部は、鉄道歴史展示室の内外で実際の遺構を見学することができます。また、現地に復元された駅舎の正面脇には、駅に入る1段目のステップの実物も保存されており、ガラス

越しに見ることができます。

3 高輪築堤跡

発掘調査では、鉄道開業時の築堤は上幅6m強、下幅17.5m、高さ4m弱の規模で、線路は単線だったことが明らかとなりました。さらに、断面構造を観察したところ、築堤の内部は波が打ち寄せる海側を意識して盛土しており、盛土された堤の両側を石垣などで押さえる構造となっていました。ただし、石垣の積み方は各所で異なり、海側（東）は一段ずつ横に目地が通る布積みの石垣が30度の勾配で積まれているのに対し、山側（西）は石を斜めに使ってほぼ垂直に積み上げる谷積みとなっていました。さらに、山側（西）の石垣の内側には布積みの石垣も存在しており、山側のみ2列の石垣が確認されました。調査の結果、布積みの石垣は開業期のものであり、谷積みの石垣は3線化拡幅時のものと考えられています。このように、高輪築堤の形態は次第に変化しており、少なくとも明治9年(1876)と明治32年(1899)の2度に亘り、山側（西）へ拡幅工事が行われていることが土層断面から確認されています。

また、築堤本体を支える役割の遺構も検出されており、海側の石垣前面には木杭が列状に打ち込まれ、杭の上部は黒色の砂利によって被覆されていました。以上が高輪築堤の基本的な構造と考えられますが、通船口の役割を果たした第7橋梁や、信号機土台部と考えられる張り出し遺構も発見されています。

このほか、特徴的な遺物としては双頭レールとチェア付きの枕木の出土が挙げられます。これらの資料は、どのようにレールが敷設されたかを考える上で重要な資料です。なお、レールやチェアといった金属製品はイギリスからの輸入品と考えられ、築堤本体で用いられているボルトやナットも同様に輸入品を使用していると考えられます。こうした部材からも西洋の技術を取り入れながら鉄道敷設に取り組んだことを窺い知ることができます。以上のように、高輪築堤は日本の交通近代化やそれに用いられた土木技術などの歴史を知る上で欠くことのできない遺跡であり、今後の調査と保存活用が期待されます。



第1図 史跡の位置



第4図 品川方面へ向けて湾曲する高輪築堤（北から）



第2図 旧新橋停車場跡駅舎の基礎石積み



第5図 第7橋梁橋台部

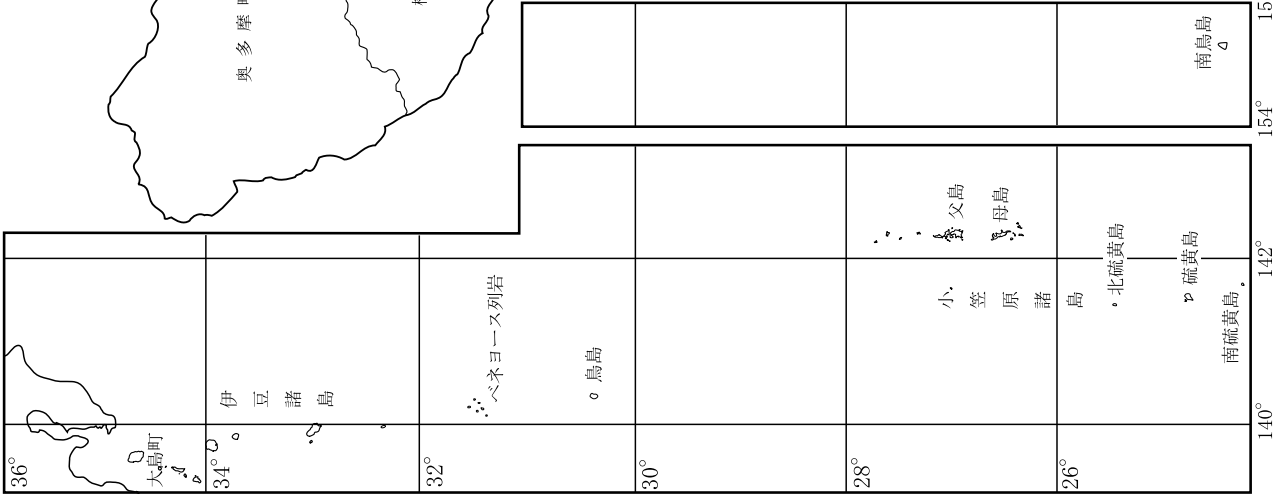


第3図 高輪築堤跡（第7橋梁部）

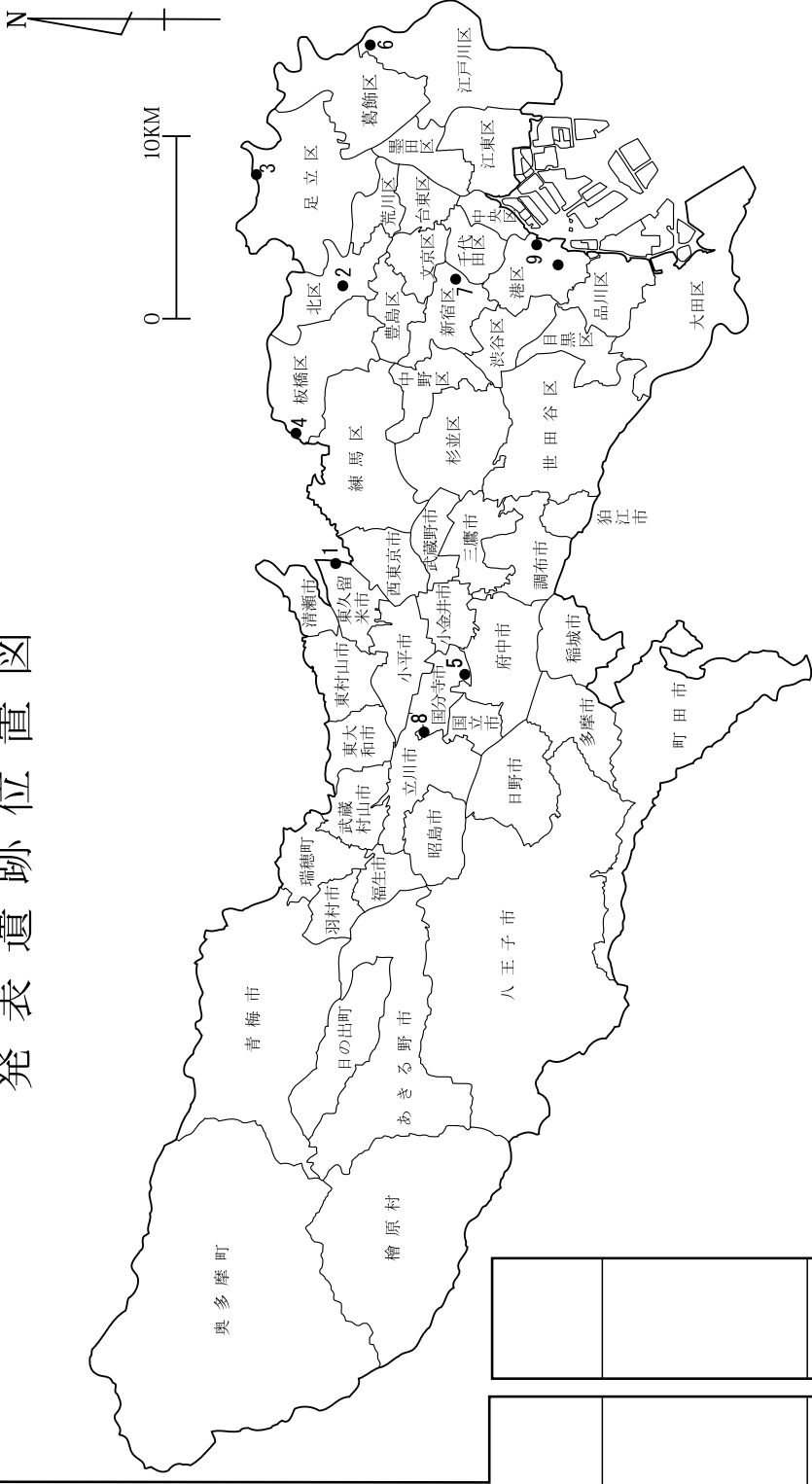


第6図 張り出し遺構（信号機跡）

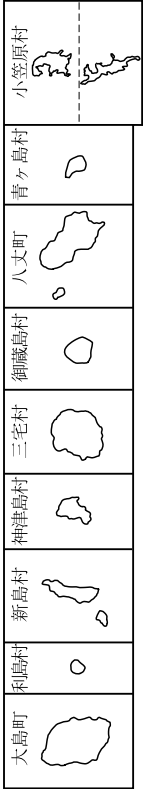
* 本稿の調査概要と写真は、令和4年6月26日（日）に埼玉県立歴史と民俗の博物館講堂にて開催された『関東考古学フェア遺跡発表会 発掘された関東の遺跡 2022』資料の平河内毅「東京都港区 史跡 旧新橋停車場跡及び高輪築堤跡—海上に堤を築いて走った日本最初の鉄道—（明治時代）」、同誌の表紙及び口絵からの転載である。転載の過程で明らかな誤字・脱字を訂正し、本発表要旨と体裁を整えるために、時代、遺構、遺物、キーワード、遺跡の特徴を加えた。



発表遺跡位置図



- 1 : 川岸遺跡 2 : 十条台遺跡群南橋遺跡 3 : 花畑遺跡 4 : 成増天神脇遺跡横穴墓群
5 : 武蔵国分僧寺跡 - 北方・推定中院地区 - 6 : 上小岩遺跡 7 : 納戸町遺跡
8 : 中藤新田分水跡（胎内堀） 9 : 国史跡旧新橋停車場跡及び高輪築堤跡



【要旨執筆者一覧】

発表 1	佐藤悠登（東京都埋蔵文化財センター）
発表 2	山崎太郎（東京都埋蔵文化財センター）
発表 3	増田静香（足立区伊興遺跡公園展示館）
発表 4	小山侑里子（板橋区教育委員会）
公開講演	酒井清治（駒澤大学名誉教授）
発表 5	依田亮一（国分寺市教育委員会）
発表 6	高橋 亮（江戸川区教育委員会）
発表 7	尾田識好（東京都埋蔵文化財センター）
発表 8	寺前めぐみ（国分寺市役所）
紙上発表	平河内 毅（港区教育委員会）

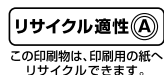
東京都遺跡調査・研究発表会 48 発表要旨
令和 5 年 1 月 22 日発行

東京都教育委員会印刷物登録令和 4 年度第 60 号

編 集 東京都教育委員会
（公財）東京都スポーツ文化事業団
東京都埋蔵文化財センター

発 行 東京都教育委員会

印 刷 株式会社まこと印刷



古紙パルプ配合率60%再生紙を使用しています